

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライブイングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第31回 主治医を変えようということ

退院後、初めての外来診療の日、トラブルは起こった。主治医とわたしの見解の違いから起こった出来事だった。わたしの糖尿病での症状は以下の通り。  
日に4回のインシュリン

## 自分の命は自分で守る

ン注射を行い、打っている単位は朝38単位、昼20単位、夕20単位、寝る前16単位(別の薬)、計94単位。普通では考えられない単位を打っている。

入院した際、急激に単位数が増えた。これは私自身の不養生によるものだろう。入院時にはきちんと血糖測定し、インシュリンを打っていた。数値にバラツキがみられたからだ。時には300を超え、時には100を切ってしまう。相当なばらつきなのだ。退院後もその傾向は変わらない。だからきちんと測定して、打つのを心がけたかった。

それにもかかわらず主治医は測定器具を少ししか処方しなかった。1日に4回インシュリンを打つのに、測定は1日2回ほど。数値の変動があるので心配だから、毎回測定したいと言ったが受け入れてくれなかった。国で決められたことだと主治医は言った。

測定用の諸器具は院内で処方される。つまり退院後は計測せずにインシュリンを打てということか。入院時には毎回きちんと測定していたのに、退院したらいい加減に打てということなのか。これはおかしいことだと直感した。厚生労働省の担当課に電話した。担当者によれば、規定は主治医の言った通りだが、但し書きがあるとのことだ。

患者は医師にのちを預けている。それなのに簡単に人を診てもらったら困る。そこで入院していた時、主治医だった医師に担当を変更してほしいと申し入れた。多少強引だったかもしれないが、自分のいのちは自分で守らなければ誰が守ってくれるのだろう。それ以来、新しい主治医とは楽しく真剣に討議しながら治療を続けている。場合によってはこのような決断も患者はしなければならないと思う。

と。つまり「場合によりその数量を超えることも可なり」ということだ。早速主治医に申し入れたが、はっきりとした返事はなかった。